

---

# 雨の死神

鶲鳴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の死神

### 【Zマーク】

Z2926Z

### 【作者名】

翳鴉

### 【あらすじ】

雨の日に一人立っている少女。そんな所に幼い少年が傘を渡してくれた。  
そして10年後…。

## プロローグ

ある雨の日

。

「…誰も、僕の事を信じてくれない。」

雨の日

。

「…世界が無くなれば良い。」

雨の日

。

「…人間など…所詮…。」

少女は一人、雨の中を歩いていた。

「ちょっと、お姉ちゃん。」

「…？」

「…？」

幼い少年は少女に話しかけてきて、傘を渡した。

「お姉ちゃん、風邪引く。」

「…なぜ…？」

「だって、母ちゃんも父ちゃんも人には優しくしないで？」

「！？…。そうか。」

「じゃあね。」

幼い少年は雨の中を走つて行った。

そして、少女はどこかに消えていつてしまった。

「…雨が好きな人間はいるのだろうか…。」

## 1句 口音変化

「要ー もつ もと起あるー。」

ガラツー ガラツー！

女の人が部屋のカーテンを開ける。

「ん？……。」

ベッドには、少年が寝ていた。

「要ー もつ もと起きなさいー！」

「…今何時？」

「7時45分よ。」

「…ふわあ～…。」

少年は用意を始める。

「朝だ」はんできてるから。」

「ん。分かった。」

少年はあいまいな返事をする。

少年の名前は『時雨』しぐれかなめ 中学2年生。

要の中学校は学ランではなく、高校生などが着る制服でいいらしい。

「はい、要。お弁当ー。」

「ありがとな、ねえちやん。じゃあ行つてくる。」

要は口にパンをくわえて家を出た。

要はとても、マイペース。  
「……。」

「うわあーんー。」

子供が道中で泣いていた。  
「ん？…どうした？」

「お母さんがいなくなつたの。」

「さうか、じゃあお兄ちゃんが一緒に探してやるよ」二ノ口シ

「ありがとう!」

そして、要は子供の母親を見つけて、学校に向かう。

時刻08：10

。

「…ん？あつ『△』。」

要は道に落ちてる『△』を公園の『△』箱にまで入れる。

「はあ～…今日も平和な日常だなあ～」

要はとても親切?というか、そう言ひつ“正義感”がある。

「あつ…遅刻するな。」

要はパンを全て食べる。

そして、いつものように登校する。

「ふわあ～…眠い。」

「おつす！時雨！」

「ん？…澤倉?なんだ?」

「相変わらずだな。お前は。」

「??。」

「いいから、わざと行かないと遅刻するぞーー!」

「知ってる。」

要は成績優秀、女子にも男子にもそこそこ人気者。先生にも頼られる事が多いが。

あまりのマイペースに結構ウザがられる事もある。

ガラツ

教室に入り、席に着く。

要の席は窓際の一番後ろの席。

「時雨君！ここ、教えてほしいの。いいかな？」

「ん？…別にいいけど。」

要は誰にでも親切で優しい。

タツ…。

「…雨が降つてない日は嫌いだ…。」

電信柱の上に立つ少女、小さな傘を広げていた。

「雨…。」

「雨がどうかしたの？時雨君？」

「いや…。」

要は窓から外を見る。

ガラッ

「……要…！…！」

「ん？」

バコンッ…！

「！？…。」

「時雨君大丈夫？」

いきなり要が少女に殴られる。

「痛ッ…。」

「あんたねー告白されてもっと言い方とか無いわけーー！」

「…吳羽？…。」

「聞け！！人の話！」

少女の名前は『 笠野吳羽』 要の幼馴染。

「何？…。」

「昨日、告白されたんでしょう。なら、断る言ひ方を考えろ……。」

「あ～…悪かったよ。」

「…?…私に謝られても困るし…。」

要は素直に謝る。黒羽は頬を赤くして田をそらして言ひ。

「俺に告白しても、意味無いのに。」

「えつ?どうしてよ?」

「俺、幼い頃からずっとと思つてる人がいるしな。」

「…?…。」

「えつ…………!」

クラス中、全員が驚いていた。

「??。」

「…時雨要…。」ボソッ

少女は、傘の持つところに書いてある名前を読んだ。

## 2句 始まりの出会い

「…匂づ。」

少女は突然電信柱から消えた。

ドクンッ！

「！？…。」

「時雨君？」

「あついや…なんでもない。」

要は少し顔色が悪かつた。

なんだ？今の違和感…。

そして、空は曇り。

やがて、雨になつた。

「雨だ、天気予報と違つ。」

「…雨…。」

ドクンッ！

「！？…。」

『…人間とは、珍しい物だ…。』

』

「…お前は誰だ！」

「…お前は誰だ！」

「…えつ？時雨君？」

「あつ...」のん。

要はそつと教室から出ていった。

「見つけた。」

「えつ！？」

要が廊下に出る、そしたら窓から化け物が要を襲う。

スツ  
！

なつ！？

「西行」

化け物は消える。

タツ

平氣が？」

卷之三

「喰われる？」

：呆れる まあ いし

「お母様へ贈る」

「雨神。」

「つて… なんで俺雨降ってるのに、ぬれてないんだ?」

「神？」

「見つけた。

卷之三

雨神は要を抱えて、  
飛ぶ。

「なんだアレ！」

「あれば、”死魔”<sup>カク</sup>能力を持っている人間を喰う。」

「何！？…。だけど俺には能力なんて…。」

「…ある。かつて私がお前に授けた能力。」

「はあ？」

タツ

地面に着地して、走る。

「…雨、突き刺され。」

雨神が傘を化け物に向ける。

そして、雨は氷のようになるとがる。

そして、化け物に突き刺さる。

「グワアアアアアアアア…！」

化け物から、血が大量に出てくる。

「…逃げるぞ。」

「あつ！…。」

「…人間は本当に哀れだ。」

「…。」

『お姉ちゃん、濡れちゃうよ。』

なぜだ…なぜ、歳を取つていない。

「…再生を始めたか。」

「えつ？」

化け物の傷は全て再生する。

「 やハ やハ、 田を覗めや! 。

「？」と、俺は尋ねた。

「俄羅斯」圖書館

「私は神の力で雨を宿す。その力で君の力となれ。」

雨化に物に陰に注ぐ

「ブリ」

卷之三

：あし一にはあんた攻撃しや  
死ななし

えー？ 神たそーあんた！」

「私は、お前に力をあたえ、もう半分しか力が無い!」

「！」？

「……馬一王かーあの田舎者であった馬一王をー」

ドクンッ！

「！？」

要の様子がおかしかった。

『人間、力がほしいと思わないか？』  
『ほしいよ、誰かを守れるようなそんな力が。』  
『…なら私がやろう…また10年後その力は發揮される。』  
『お姉ちゃんと出会つか分からぬよ？』  
…それもそうだな。』

「！？… 雨神とであつたあの日…俺は死神になつた！」



「うわああああああああ……！」

「ジャキッ！……！」

「グワアアアアアアアアアア……！」

死魔は真つ二つになつて、血を流して倒れて消えた。

「……やつたのか？」

「……ああ、よくや……。」

ガクッ！

「雨神！」

雨神が突然しゃがみこむ。

「……大丈夫だ、ただ力を使いすぎただけだ……。」

「そうか？なら、いいけど。」

雨神は立ち上がる。

「……それで、要は家に帰るのか？」

「あつおう、雨神は？」

「……私に家など無いが……今は雨が降つている傘。」

「あつ……これ、昔俺が……。」

要が傘を見て言つ。

「捨てないで居てくれたんだな！ありがとう……。」ニコッ

「……別に、気に入つただけで……。」

「まあ、だけど、ありがとう！」ニコッ

「……いいから、さっさと帰れ。私は要の見張りをしてくる。」

「はいはい！じゃあな！雨神！」ニコッ

「……。」

そして、傘が無くなつた途端に、雨神に雨が掛かつた。

要を見ると、まったく濡れていなかつた。

「……傘が無いと、自分自身じゃいられない……。」

雨神の体が少し震えているように見える。  
そして、いつしか雨神は消えていた。

「……。」

あの時も、何も無い私に、あの子供が話しかけた。

こんな化け物みたいな私に、傘を渡してくれた。

嬉しかった。

こんな人間もいるんだなって思えて……。

「要…。」

雨神はビショ濡れになりながら、一人で歩いていた。

## 4句 不幸な日々？ 1

ガラツ

「ん？…。」

5時ちよつと前に、要の部屋の窓が開いた。

タツ…。

「…誰？」

「…雨神。」

「何！…って…何してるんだよ…。」

「…傘を返してくれないか？」

「あつ…はい。」

要は雨神に傘を返した。

「…邪魔したな。」

雨神は窓から出て行つた。

「なんだつたんだ？…。」

要はベッドに寝転がる。

タツ

「…ん？なんだ、死魔か。」

雨神の目の前には、一人の少女が居た。

「！？…。」

「ふわあ…眠い。」

「…いつてらっしゃい。」

要は、いつもよつ早く学校に向かつた。

ブーッ！！！

バイクが要をひひりつとする。

「……。」

タツ

要が軽くよけた。

「あぶねえーの。」

要はそのまま気にせず学校に向かつた。

そして、なぜか学校には、いつもより早くついた。

「……ハア……ハア……グツ……。」

タツタツ

要が階段を上がる。

「……私では倒せない……。」

ガラツ

「……？……。」

「……要……。」

「雨神！……」

要の目の前には、壁にもたれて肩から血を流してゐる雨神だった。

「雨神、何が合つた！」

「……すまない、私は……。」

「雨神……。」

「見つけたよ。雨神ちやあ～ん」一一口ツ

「……？……。」

「えへへへへ」一一口ツ

一人の少女が微笑みながら槍を投げる。

グイッ！！

ドスツ！！

「なつー？あつぶねえー。」

「…要…。」

学校半分がなくなるほどの威力だった。

「当たらなかつたかあ～」ニコツ

「お前誰だ！」

「私？私は、亞隈あくま。」

「亞隈？…。」

「そう、死魔とは違つて人型で力も能力も違つ…！」ニコツ

「…要、逃げる。」

「何言つてるんだよ！お前はどうなるんだよ…。」

「…あいつは、お前が勝てる相手じゃない…。」

「雨神！俺を信じてくれ。」

ドクンツ！

「！？…。」

雨神はそのまま、気を失つてしまつた。

スツ

「あれ？君が相手？」

「そうだな、俺は時雨要！」

「そつか、私は亞隈のナクル。」

要は鎧を着て、周りには無限に存在する刃が出ていた。

## 5句 不幸な日々？ 2

カキンッ！！！

「チツ！」

「やるねえ～、死神に力貰つてここまでできたの、君が初めてだよ」

「コツ

「余裕こいでると、後で知らんからなーー！」

ドスツ！

壁に刀が刺さる。

「貰つた！！」

「：。」

「何！？」

刀がナクルに襲い掛かる。

「なんてね。」

「！？。」

「氷線氷刃！」

刀が全て凍り、粉々になってしまった。

「……。」

「君はおしい。だけど倒せない。」

「俺は、雨神を守るそれだけだ！！！」

「その正義を壊してあげるよーーー！」

「雨の刃。」

グサツ！！！

「！？なつ。」

ナクルに雨の刃が刺さった。

「雨神！。」

「ハア…ハア…グツ…私の勝ちだな…。」

「チツ…今日は多めに見てやるよーーー！」

ナクルは消えた。

「…ハア…ハア…グッ…。」

「雨神！」

要の術も解ける。

「大丈夫か？」

「…ああ…たいした」とはない…。」

「そうか。」

「…大丈夫だ…。」

雨神はよろよろ立ち上がる。

「…雨よ…幻覚。」

学校全体が元どおりになった。

「戻った？」

「…私の幻覚…だが、私が死ねば解ける。」

「…そうか…。」

「…学校の時間だ…私は行く。」

「雨神！」

後ろを向いたが、雨神は消えていた。

雨神…ごめん。

「…要…。」

「…ニニニニ。」

「うつそ…。」

吳羽は自分の席で寝ている要に驚いていた。

「ん?…どうした?吳羽?」

要が田を覚ます。

「どうして！－いつもなら、私が一番なのに－－！」

「…別に、気分気分。」

「何よ！－告白とかされてるからっていい氣にならないでよ－－！」

呉羽は頬を赤めて強めに言ひ。

「そうだな…いい氣になつてたな。ごめん。」

「…？…な、何よ！－それで許されたと思つてるの…」

「俺は強くなるんだ。雨神を守れるような男に。」

「…？…雨神？誰よそれ！－！」

「別に、呉羽に関係ないし。」

呉羽は要は聞くが要は教えてはくれなかつた。

「…私も、そろそろ、人間觀察をするか…。」

ガラツ

先生が教室に入つてくれる。

「転入生を紹介する。」

「えつ？こんな時期に？」

「入つて来い。」

ガラツ

「…ん？…なつ－－！」

ガタツ－－！

要が驚いて立ち上がる。

「うわあああ……可愛いじゃん……」

「俺タイプ！……」

男子達がとても、興奮していた。

「転入生の、雨神瑞羅さんだ。」

「…雨神瑞羅。よろしく頼む。」

雨神が要の学校に転入してきた。

「ヤバイ……超クールでカッコイイ……」

「じゃあ、雨神は、時雨の隣。」

「…分かった。」

「時雨、教えてやつてくれ。」

「あつ……おつ。」

要は動搖を隠し切れないほど、動搖していた。

カタツ

雨神が席に座る。

「おい、雨神。何してるんだよ。」ボソッ

「…人間觀察だ。要と語る方が好きだしな。」ボソッ

「…？… そつかよ…。」

要は頬を真っ赤に染めていた。

何よ……要の奴……ちやせりあれてるからっていい気に成り上がつて……！

## 6句 不幸な日々？ 3

「…時雨君、私に学校案内をしてくれないか？」

「あついぜ」——「」

「…ありがとう。」

「ちょっと待った！……！」

要と雨神が教室を出ようとするが、異羽が止める。

「ん？どうかしたのか？」

「…異羽？」

「俺の幼馴染でこのクラスの委員長だよ。」

「…そうなのか？」

「クラスの事聞くときは異羽に聞くといいぜ」——「」

「…分かった。やつする。」

「ちょっと一人の話聞きなさいよーー。」

一人の仲を異羽がさえぎる。

「なんだ？」

「…異羽さん。」

「何？雨神さん？」

「…この頃妙に苛々するか？」

「えつ？まあ、うん。それがどうした？」

「…あつ別に、何でもないぞ。時雨君、案内してくれないか？」

「了解。」

そして、二人は教室を出た。

「あの一人、仲いいよねえ。」  
「出来てるんじゃない？」  
「だけど、委員長いるでしょ？」「？」  
「二股？」

「ああ…………もづ……鬱陶しいのよ…………」

呉羽は教室で叫ぶ。

「さつき、何か見えたのか？」

「……あの呉羽という人間、死魔にとりつかれてる。」

「はあ！？」

「早く、倒さないと、呉羽は死ぬぞ？」

「！？……駄目だ！呉羽は死なせない！必ず、俺が守つてみせる。」

タツ

「！？……」

雨神が急に右足を地面につけて、頭を下げて言つた。

「……それがあなたの覚悟なら、私は一生あなたの物になります。」

「！？……サンキューな！雨神！」二コツ

まつたく……人間と言つ物は……。

ドクンツ！

「？！……」

「委員長？？」

何？……苦しい……要……助けて……要……

バタンツ

「委員長！！」

呉羽が教室で倒れた。

「…現れた。」

「急ぐぞ！！」

雨神と要は教室に戻る。

ガラツ！

「…？…。」

「はははははははは…！…！…楽しいわ！」

「呉羽！」

「ああ？」

呉羽は血だらけだった。

そして、呉羽の周りには死体がいっぱい倒れていた。

「呉羽？…。」

「…貴様、人間ではないのか？」

「ははははは、私の名は亞隈の呉羽！…。」

「亞隈？…呉羽が？…。」

「…要、戦わないのか？」

「俺は…倒せない！」

「…貴様の覚悟はそんな物だったのか…。」

「死ねばいいわ。」

呉羽が帽子から、無数の人形を出す。

そして、人形は武器を持つて要に襲い掛かる。

「…！…！」

グサツ！…！…！

「…？…。」

「…貴様は…私が…守る…うつん、守りたい…。」

「…？…雨神…。」

ドクンッ！

「はははははははははは……血だ……！」

ドスツ！

「！？…。」

呉羽が雨神の体を素手で刺す。

「！？ガハツ！…。」

雨神は血を吐いた。

「…雨…神…。」

ドクンッ！

「…私は…平氣だ…。」

バタンッ…。

「…！？…。」

ドクンッ！

「…うわああああああああああ…！…！…。」

## 7句 守る人

「雨神が！」。

雨神が血を流して氣を失っている。

「雨神！おい！」

「ははははははは、死んじゃったー！」

「ヤッ

ドクンッ！

「！？」

「！？」

俺が助けてもらつた。

ドクンッ！

俺は守れなかつた。

ドクンッ

「俺は」。

「……守つて……見せてくれ……」

「！？」

「雨神。」

「貴様の……力を……」

「分かつた！俺は、守る！」

「ドクンッ！――！」

俺に力を、誰もかもを守れるようなそんな力を俺にくれ！――！

「グッ」。

雨神はよろよろ座り込む。

血はもう止まっていた、傷は遅いが治り始めていた。

「…やはり…貴様は…選んで正解だつたな…。」

そして、要の田の前には。

「！？…これは？…。」

銀色に光る刃が出てきた。

「…それが、要の武器になる。」

「俺の？」

「…そう、だから…もう何も恐れるな。」

「！？…分かつた！…！」

「死ねばいいのになあ～か・え・る…。」

呉羽は巨大なかえるを出す。

「なっ！？デカッ！…！」

要は武器を取る。そして構える。

「…できる。」

「守つてみせる…。」

かえるを炎を吐き出す。

「…我、死神の力を宿した人間に属性の力を…。」

そして、要の刃が光つた。

「なんだ！？」

「…要は炎を使う、剣士か、合つて<sup>きし</sup>いるな。」

「俺は、守る！そのためなら…！…！」

「グワアアアアアアアアアアア…！…！…！…！」

かえるがはいた炎が要達の田の前に来る。

「氷炎華！」

ひょうえんか

氷と炎が混ざり合った攻撃がかえる事吹き飛ばす。

「…まあ、いつか。今日はここまで。バイバイ」ニコッ

異羽は消えた。

ヨロツ！

バタンツ！

「…要！」

要是武器を消して、倒れる。

「エヘヘ、俺守れたかな？」

「…守れたよ、私を守ってくれた。」

「そつか…。ZZZZ」

そのまま要是眠ってしまった。

人間はいつも可愛いものなのだな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2926z/>

---

雨の死神

2011年12月19日16時51分発行